

ます。

廿日市の町屋が焼失した時は、昭和二十年の終戦直後の状態とよく似ていて、水一杯も売買していたそうです。年貢は減らされることがなく前のまま取られたそうです。

高本等先生談

この様な状態では、ここに住める道理はないと、小生も思いました。

(廿日市の町屋焼失の研究は、故石田米孝先生がふるさとの歴史探訪と題して、廿日市の文化第13・14集の中に掲載されています。)

自然賛歌

極楽寺山の自然観察(三)

妹尾 冶 人

旧登山道を登り四丁碑まで来ると、なだらかな歩きやすい山道となる。極楽寺山は、見る場所それぞれ姿がかわるが四丁碑から五丁碑辺りからの眺めは山が身近に迫り格別に美しい。山に入ると山が見えないと言われるとおりの六丁碑を過ぎると雄大な山の全容はもう見られない。

この辺は雑木林で、リョウブ、タブノキ、カクレミノ、クロキ、山ザクラ、カシ、コナラ等が見られる。雑木林には野鳥も多く、ヤマガラ、シジュウカラ、ウグイス等のさえずりが聞こえる。この辺りの道は落葉が堆積しふわふわして気持ちよく歩ける。こんな場所には、きのこも多くテングタケ、イボガサタケ、ノウタケ、キツネノカラカサ

等が目を楽しませてくれる。

ところでこの辺で多く見られるリョウブは漢字では「令法」と書く、植物の名前にはそれぞれ由来がある。令法の由来は飢餓に備えてリョウブの葉を備蓄するようお触れ(法令)がでたためだと言われている。廿日市町史(上)にも飢餓に備えて木の実、木の葉を備蓄するよう藩のお触れが出たと記録されている。

享保、天明の飢餓は大変きびしいもので、廿日市町史によると享保十六(1731)十八(1733)の間に廿日市で一六五人の餓死者が出ている。その時の餓死者の霊を慰める為、「法界萬霊」と刻まれた大きな供養塔が廿日市の斎場の下の広場に立てられている。

古老の話では、リョウブの葉はお浸し、和え物、炊き込みご飯、天ぷらにして食べたと聞く。試食してみたが天ぷら以外は美味しいとは思わなかった。リョウブだけではなく何か他の食材と混ぜて料理するとよさそうだ。

なだらかな旧道を進み左手に六丁碑を見てしばらく行くと平良からの新道と合流する。そこには小さな案内板が付けられている、その左手の雑木林のなかにカラス山椒がある。目の高さの直径二十cm、高さ十数米の大木だ。山椒には、トゲがあるがこれだけの大木になるとトゲの針は無くなって木肌にトゲの痕跡がいぼ状になっている。このカラス山椒は雌木で秋に紅紫色の実が見られる。雄木もある筈だが数が少なくまだ雄木の確認はしていない。

新道と合流して五〇m程進むと左手に七丁碑がある。七丁碑には次の刻印が見られる。

右 萬屋武吉 (梵字の多はオンと読む)

表 多七丁

七丁碑の前にクロ木、左側にタブノ木、右側にカクレミノがある。一丁は六〇間(約一〇九米)でそろそろ次の八丁碑があってもよい筈だが見当たらない、何処かこの辺に埋没しているものと思われる(次号に続く)



リョウブの花



リョウブの木肌

この自然観察シリーズでは、藤下氏が「さくらお」に連載された極楽寺道三十七丁ぶらり登山の記事と廿日市町史を参考にさせてもらっている。

日本自然保護協会 自然観察指導員